

予測不能な未来だからこそ、目指したい未来を描いて、誇りを持って進むべき。

—— グラミン銀行創設者 九州大学名誉教授 ムハマド・ユヌス氏



ムハマド・ユヌス

(মুহাম্মদ ইউনুস, Muhammad Yunus)

グラミン銀行元総裁。マイクロクレジットの創始者。経済博士。

ダッカ大学卒業後渡米。1969年にヴァンタービルト大学経済学博士号取得。1972年までミドルテネシー州立大学で経済学の助教授を務め、1972年に帰国、チッタゴン大学経済学部長に就任。1976年にグラミン銀行プロジェクトを開始、ソーシャルビジネスを提唱。

2001年第12回福岡アジア文化賞大賞受賞、2006年ノーベル平和賞受賞。

時代がより速く変化するようになった25年

25年というのは、様々な変化が起こりうる期間です。特にこれまでの四半世紀の世界は、過去では1世紀の期間を要するような、大きな変化を経験しました。25年前から更にさかのぼった時代からは想像すらできないドラマチックな変化です。例えば、今から約70年前の1940年代から考えますと、当時は飛行機で移動することが非日常的な時代でありました。1900年代初頭に動力付きの飛行機が製造されましたが、1940年代はまだ軍事利用が主要で、大西洋の横断がセンセーショナルな時代でした。その25年後、パリからニューヨークに超音速で渡れるようになりましたが、過去の25年はその程度の変化が起きうる25年だったと言えるでしょう。

この25年はテクノロジー、特に情報通信テクノロジーがドラマチックに変化した時代でしょう。コンピューターは実に大きく変わりました。過去は大型の機械として、大学や大企業に専用の部屋が設けられて使われるものでしたが、今では、当時よりも遥かに能力が高いコンピューターが、遥かに小さいデバイスとなっ

ています。1980年代によく市場に出てきた携帯電話も、今や全中国、インドやバングラデッシュの半数の人口が手にするようになりました。そして、携帯そのものも日々進化しており、計算やメッセージ発信など、様々な機能が付加されています。コピー機、FAX、電子メールなど、人々の情報伝達手段も大きく変わってきたと言えます。

また、様々な難病の治癒も進みました。25年前では、死の病とされていた結核はほぼ根絶されましたし、仮に感染しても、過去とは比べものにならないほど簡単に治療ができます。癌やHIV感染症も、現在では不治の病だとは決して言えません。早期の発見が可能になり、早期の症状緩和も可能になっています。

時代の変化は速い、というだけでなく、時代の変化はますます速くなっていると言えるのではないのでしょうか。

25年先の未来は予測不能

今の子供たちをみると、10歳に満たない子供たちが既にパソコン、ゲーム機や携帯電話など、大人が苦しみながら使っているデバイス

を、実にたくみに、トラブルがあっても説明書も読まずに使いこなしています。彼らは非常に自然に、もって生まれたような形で情報機器を扱い、フェイスブックなどのサービスに親しんでおり、機械のマインドを理解している世代とも言えるでしょう。このような世代が未来を創っていくのです。

政治の世界をみてみましょう。ベルリンの壁は崩壊する直前まで、誰もその崩壊を予想できませんでした。最も予想できうる立場にいたゴルバチョフですら、その2日前の発言を聞く限り、予想だにしていなかったと言えます。さらに言えば、誰も平和的な形で崩壊するなどとは夢にも思っていなかったでしょう。しかし現実には、武力や暴力ではなく、東西の市民がどこからともなく集まって、壁の破壊活動が行われたのです。そしてその後、旧ソ連の体制も変わり、同じ体制だったロシアとグルジアは、別の国になって紛争を起こしたりしています。EU 全体に関しても同じことが言えます。数世紀に渡って殺戮を繰り返して、国同士敵対してきた地域が、同じ欧州旗、同じ通貨で、パスポートもビザもなく自由に行き来できる統合された経済圏になると、誰が予想していたでしょうか。

それまでの時代では不可能だと思われてきたことが、ごく自然に、当然のこのように実現していくのがこの25年の時代の変化だと思います。言葉を変えれば、この先の25年というのは、全く予測しえないものだと言えます。科学技術の変化も、政治の変化も、さらには今のデジタル世代が創っていく未来の社会の生活の変化も予測できないでしょう。

これから25年後、今では想像できませんが、世界中をパスポートなく、ビザなしで移動できる時代が来るかもしれません。出入国の手続きは、指紋すら必要なく、身体自体が記憶媒体になっている可能性だって考えられます。身体に触れることなく、その人の病気や感染症が分か

るようなゲートが空港に置かれるかもしれません。むしろ25年前に何故パスポートやビザを使っていたかを不思議に思える時代になるのではないのでしょうか。25年後の予測は、このようにまさにSFの世界になってしまうでしょう。ただ、そうだとしても、実際にその時代になってみると、そのSF的な予想が当然のことになっている可能性だってあるのです。

目指す未来を描いて、技術を活用しよう

重要なのは、そのような世界に向かって、我々がどのように準備を進めるかではないでしょうか。いかに時代変化の本流となるイベントから離れないように進めるか、いかに正しい方向に導かれていけるか、いかに間違った方向に向かわないように自律的に判断できるか、いかにこれらのイベントを我々が望むような方向に向かわせるか、といった課題に立ち向かわないといけません。つまり、25年先の目指したい未来を描いて、それに向けての努力をすべきだということです。

世界中でパスポートがなくなる、というのは一例ですが、欧州で実現したことは他の世界でも実現しようというロジックから導けます。また、世界中で起こっている南北紛争・東西紛争は、いずれ無意味なものになっていくのではないのでしょうか。というのも、技術の進化によって、今では言葉が通じない人々同士が、それぞれの言語で話をして、相互が聞き取れるようなコミュニケーションが可能になり、言語の障壁が著しく下がることになるでしょう。そうすれば、人々は同じ理由で感動したり、泣いたり笑ったりして、同じ人類としての共感が生まれるのではないのでしょうか。また、個々人に技術が行き渡らせることで、個々人が色んな情報に接し、事業に参加する機会も増え、貧困も少なくなっていく可能性があります。世界中でパスポートがなくなるという未来を描いて、それに

向かって技術の方向性を定め、技術を活用して
いくような発想が重要です。

福岡が技術活用の方向性を世界に示そう

最後に福岡市についてですが、福岡市はアジア文化のメルティング・ポット(るつぼ)です。様々な人々が集まる、日本の文化の一つの中心でもあります。福岡は引き続き人々を呼びこみ、融合させる役割を果たすべきです。

また、福岡は日本の様々な技術やソリューションを活用できるポジションにあり、日本のエンジンになることも可能です。ただし、先程も言いましたが、技術活用の方向性を示すことが大事です。何が正しい方向性なのか福岡市は誇りをもって示さないといけません。

25年後、技術の進歩により人々の生活は変わっているかと思いますが、人々のコミュニティや人々のスピリットは日本に限らず、アジアや世界で先ほど言ったような、パスポートのない世界に向かうと思います。そのような世界に向かって、福岡市はどのように世界中の人々が地球をシェアしていくか、環境を大事にしているかを考えないといけないでしょう。

インタビュー日:2011/7/23 文責:URC 天野